

校長室だより

令和7年12月19日（金）
第 34 号
十日町市立中条中学校校長室

学力と経済との関わり（その2）

前号からの続きです。「テストでよい点をとればご褒美をあげます。」「本を1冊読んだらご褒美をあげます。」子どもの学力を上げる効果を持つのはどちらだったのでしょうか。

子どものやる気を育てるためには、テストの点数や成績といった「結果（アウトプット）」よりも、学びの過程や努力を認めることが大切でした。「過程や努力（インプット）」にご褒美が与えられた場合は、子どもにとって何をすべきかが明確です。一方、「結果（アウトプット）」にご褒美が与えられた場合、何をすべきか、具体的な方法は示されていません。

「勉強の仕方」を勉強することが重要

アウトプットにご褒美を与えられた子どもたちは「今後もっとたくさんのご褒美を得るためには何をしたらよいと思うか」という問いに対し、ほとんど全員が「しっかり問題文を読む」「解答を見直す」などのように、テストを受ける際のテクニックについての答えに終始したのです。「分からないところを先生に質問する」「授業をしっかり聞く」などのように本質的な学力の改善に結び付く方法までは、全く考えが及んでいなかったことが分かります。

「勉強の仕方」とは？ あくまで校長の私見ですが…

2学期の期末保護者会でも、うちの子は「勉強の仕方がわからない」「どうしたらいいか」と担任に相談した例が多かったと報告を受けています。これらの相談は、アウトプットに対する期待ではないかこの本を読み返して思います。



どの授業でも生徒に身に付けさせたい力を明確にして、家庭学習で取り組んでほしいことを伝えて、宿題も出しています。それを確実にこなすことで確実に学力は上がってくると考えています。2、3年生は受験用学習教材に取り組んでいます。大切なことは、それを続けられるようなモチベーションを継続させてあげることではないのでしょうか。点数や成績だけにこだわるアウトプットばかりに目がいけば生徒のモチベーションは上がらないと考えます。

学力を付けるには、インプットを確実に与え、生徒ができる環境を整えてあげることが大切なのではないかと感じています。家に帰ってきたときに、「今日の宿題は？」と聞いて「まずそれをきちんとやろうね」そんな声かけでいいのではないかと思います。たまには、一緒に勉強することも必要ではないかと考えます。わずかな時間でも親と一緒に考えたり、時には教科書に向き合ってみたりすることも必要ではないかと思うのです。

やはり授業が大切。その授業を支える「非認知能力」の育成

IQや学力テストで計測される能力を「認知能力」と言います。それに対して「非認知能力」とは、「忍耐力がある」「社会性がある」「意欲的である」「感情のコントロールができる」などの人間の気質や性格的な特徴のようなものを指します。一般には「生きる力」と呼ばれているものです。「認知能力」を高めるだけでなく、「非認知能力」が将来の年収や人生の成功に大きく影響すると「学力の経済学」でも言われています。



「非認知能力」は「人から学び、獲得するものである」と紹介されています。その点からすれば、学校は「非認知能力」を培う大切な場所であることが分かります。

子どもにとって、授業が毎時間楽しい時間であるに越したことはありません。しかし、毎時間のすべての授業をすべての子どもにとって楽しい時間にするのは難しいことです。ちょっとつまらなかったり、難しかったりしても、「今日の授業は将来の自分にとって大切に違いがないから頑張って取り組もう」と思える「忍耐力」や「感情のコントロール」があつてこそ、学力を身に付けることができます。また、「対話的な学び」「協働的な学び」は、学ぶ仲間に対しての「思いやり」、つまり「コミュニケーション」や「社会性」が必要です。「非認知能力」が学力を支えているのは明らかだと言われています。

どんなに勉強ができて、自己管理ができず、やる気がなくて、真面目さに欠け、コミュニケーション能力の低い人が社会で活躍することは少ないと思います。一步学校の外へ出たら、学校を卒業したら、学力以外の能力が圧倒的に大切だとよく言われます。それを今のうちに身に付ける場所が学校であり、家庭が果たす役割も大きいと考えます。

では、「非認知能力」を高めるためにはどうしたらいいか。

「学力の経済学」では、大切な「非認知能力」は「自制心」と「やり抜く力」だと言います。



「自制心」の検証は、マシュマロの実験に基づきます。子どもにマシュマロを差し出し、「いつ食べてもいいですよ。ただし、大人が帰ってくるまで我慢できれば2つ食べられますよ」と指示を与えました。結果は、3分の1は大人が帰ってくるまでの15分我慢して食べずにいましたが、3分の2は食べてしまったそうです。その後の追跡調査によれば、我慢できた子どもたちはそうでない子どもたちに比べ、高校生になったときの学力に多くの差があったと言われています。

「自制心」を鍛えるのは、筋トレと同じだという説があります。継続と反復です。「背筋を伸ばせ」と言われて継続した生徒の成績が向上したという実験結果があります。「背筋を伸ばす」ような、意識しないとしづらいことを継続して行えたことで「自制心」が鍛えられたと言われています。

また「やり抜く力」は、「非常に遠い先にあるゴールに向けて、興味を失わず、努力し続ける気質」とであると定義しています。「やり抜く力」を高めるのは「心のもちよう」で、たとえば「自分の能力は生まれつきでなく、努力によって後天的に伸ばすことができる」と信じていれば「やり抜く力」が身に付くと言われます。また、先入観にとらわれないことも大切です。

「学力の経済学」の筆者は、「非認知能力」の章で以下のように締めくくっています。

子を持つご両親の多くは、お子さんの学力テストの結果に一喜一憂しがちです。点数や偏差値ははっきりと数字で表すことができ、その変化もよく分かる学力は、当然気になります。一方、非認知能力は数値化が難しいものです。その結果、きちんとしつけて非認知能力を高めるよりも100点を取らせる努力をさせた方が大事だという価値観が、私たちの社会に根付いているように思います。

しかし、心理学や経済学の実験と検証により、非認知能力への投資は、子どもの成功にとって非常に重要であることが示されています。

非認知能力は、人生のかなり長い期間にわたって、計り知れない価値を持ちます。しかし、子を持つご両親の多くは、この非認知能力が子どもの成功に与える効果を理解していない、あるいは過小評価しているように思えます。

最近では、非認知能力を鍛える手段として、部活動や課外活動に注目が集まっています。目の前の定期試験で点数上げさせるために、部活動や生徒会、社会貢献活動をやめさせることに慎重であるべきかもしれません。学力をわずかに上げるために、長い目でみて子どもたちを助けてくれるであろう「非認知能力」を培う貴重な機会を奪ってしまうことになりかねないからです。

引用 『学力』の経済学 中室牧子著 出版社(株) ディスカバリー・トゥエンティワン